

# 文化高知

'98年11月 NO.86



「桂浜」二神敬之介

# コミュニケーションの新しい風

尾崎幸博

マルチメディアと言う言葉が出現して数年たつが、最近はいんターネットとタッグを組んで、ますますその出現頻度を高めており、一過性のブームで終わりそうもない気配だ。

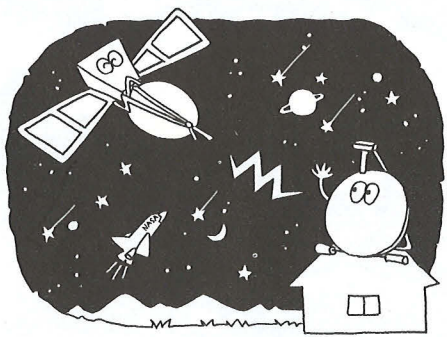
世の中、ただでさえ複雑化している折、カタカナと横文字の氾濫するものはどうも……といった中高年のほやきをよそに、産業・行政・教育といった社会のあらゆる分野にその波が押し寄せてきており、対応を迫られつつあるのが実態のようである。それに伴い、情報通信を業とする関係上か、「マルチメディア」ってちゃんなん？」と言った、至極まともなご質問をよくいただくようになった。文化の発展・伝承が、コミュニケーションによって可能となるとすれば、その新しい風とも言えるマルチメディアについて少しふれるこ

とは「文化高知」の紙面とのミスマッチにもなるまい！と、いいかげんなどところで自分を納得させて、駄文を草することとした。

現在進んでいるインターネットの爆発的発展は、コミュニケーション手段が、電話からマルチメディアへ、言い換えれば、音声主体のコミュニケーションから、映像等を伴う大量の情報受信機能を個人が扱い、グローバルなネットワークの中でコミュニケーションする時代へと移行しつつあることを示唆している。

この際、考えておく必要があるのは、映像によるコミュニケーションは、電話のように、本来人間の持っているコミュニケーション能力（音声による情報の発信（口）と受信（耳））を補佐し遠くへ運ぶだけのものと異なり、新たなコミュニケーション

ションのための能力（映像による発信）の学習を必要とすると言う点だ。人は「目」により、映像の受信能力は生来身につけているが、映像を発信する器官は持ち合わせていない。そのため、映像によるコミュニケーションのためには、その能力を学習により習得するしかない。その意味では、情報化教育が様々



などところで論議され、具体的に取組まれていることは意味のあることと思うが、その際注意すべきは、情報リテラシーの習得を急ぐ余り、情報化がコミュニケーションの手段であつて、情報化そのものは目的ではない、と言うことを忘れないことである。

情報化教育は、語学教育のアナロ

ジーで考えられる。

日本の英語教育は、英語を「コミュニケーションツール」としてとらえるのではなく、「知識」としてとらえた結果、教育された国民の大多数が、「知識」は極めて高いにもかかわらず、ほとんど「会話」のできないレベルにとどまり、近年、国際化の進む中で、「言葉の壁」の存在を、いやと言うほど味合わされているのは周知の事実である。

二十一世紀が高度情報化に向かう社会とすれば、また、情報化が「コミュニケーション」の手段であるとするならば、子どもたちにその能力を与えられるかどうか、次の時代に伍していけるかどうかの大きな鍵を握っているといっても過言ではない。帰国子女を見て分かる通り、子ども時代に環境を与えれば、自然に、英語の「会話」能力を身につける。子どもに、「情報リテラシー」を「教える」のではなく、潤沢な環境を与えて「遊ばせる」ことで、自らコミュニケーション能力を身につけさせるようにしたい。「英語」教育の二の舞をさせないためにも考えてみる価値のある課題と思っている。

おさきゆきひろ・N.T.T高知支店支店長

## 北見の自然と風土

〜ところ変われば虫変わる〜

柳谷卓彦

先日、高知市環境下水道総務課長の吉松靖峯さんが来訪され、高知を代表する昆虫ヒラズゲンセイを寄贈していただきました。初めて見る南国土佐を代表する色、形に鮮烈な印象を受けました。さらに共生関係にあるクマバチの標本もいただき、教科書でしか見たことがない北見の子どもたちにも本物を見せることができました。今も公開して、高知市の豊かな自然のエッセンスを北見市民に伝えています。本当にありがとうございます。



代表市を「オオチモン蝶」を北見市



はありませぬが、北方要素の一つオオチモンジという北見市を代表する蝶を紹介いたします。こ

ございました。

このように、「ところ変われば品変わる」は、人間生活に限られたことではなく、昆虫の世界にも見られます。

北見市で比較的分布調査が精密に行われている蝶類を動物地理学的に分類してみると七五・九%が旧北区系と朝鮮ウスリー系種の北方要素が占め、ヨーロッパ・シベリア・沿海州との共通種が多く生息していることが分かります。その理由は二万年前に終わった氷河時代に、本州と比べ大陸とつながっていた時間が北海道の方が長かったためです。

土佐の珍虫ヒラズゲンセイほどで

の蝶は、本州では高山蝶の仲間、長野県の上高地や栃木県の奥日光などで見ることが出来ます。しかし、その数は少なく観察することが容易ではありません。そのため、この蝶との出会いを求めて発生時期の七月には、全国から昆虫好きの人たちが北見市へやってきます。大きさは八センチぐらいで、黒い色調に白線が名前の通り真一文字に描かれた大型のタテハチョウの仲間です。飛び方は力強く、あまり羽ばたかず林間を滑空し、円を描きながら地上においてきます。ドイツの作家シュナックの「蝶の生活」という本の中で、その姿をうまく表現しているの

で部分的に拾ってみます。「羽の表面は暗い褐色であるが、力強い白い帯と白い斑点がこのピロイドのような地色の上に光っている。後翅のギザギザになっている外縁に向かつて、優雅な、夕焼けのように赤い弦月紋が波のように打ち寄せている。それは過去に没した何千年も

のオオチモンジの時代が、この蝶に与えた北極光の飾りである。燃えるような黄褐色と白い帯のある羽の裏面には、いくつかの不思議な黒い影と、冷たい、みどりの川の氷が宿っている。この氷の色が、この蝶に『大水蝶（ドイツ名）』という美しい名前を与えたのである」と書かれ

ています。

この蝶はドイツなどヨーロッパ中部とアジアの針広混交林地帯にも広く分布しています。食べ物、ヤナギの仲間のヤマナラシやドロヤナギです。ドロヤナギは、乳白色の樹肌で高さ二十〜三十センチにもなる立派な大木で、市内どこにも見られる代表的な樹木です。オオチモンジが優雅に飛ぶ北見市は、南国土佐とは別世界、まさに高原の避暑地と同じなのです。

高知県から明治三十年五月七日、この地にキリスト教的理想の村設立を目的として入植し、夏の寒暖プラス・マイナス三〇度の自然を克服し北見開拓の礎となった北光社の人々には、このような自然がどのように映ったのでしょうか。文化はその土地の歴史と自然によって生み出されます。

百一年前、高知からやって来た文化が、この土地の独自の自然や歴史の中でどのような変遷をたどって来たのか興味関心は尽きません。今年ヒラズゲンセイが結んでくれた縁が、お互いの自然と文化を知ることによってさらなる発展につながることに期待したいものです。

やなぎやたくひこ・北網園北見文化センター学芸員

高知市九反田に市民の芸術、文化活動の成果を発表し、また鑑賞の場としてのホールとギャラリーの建設と合わせて、名誉市民横山隆一氏を記念したまんが館、生涯学習の拠点としての公民館を複合施設として（仮称）市民総合文化プラザの建設が始まった。

地下三階地上十一階、延べ面積は約三万六千平方メートル、総工事費百九十億円という巨大な施設。

●文化ホール 最大千八百五十席の多用な演目に対応する多機能ホール、小ホール百八十席。

●ギャラリー 展示面積千五百平方メートル。大小五室の展示室で構成。市民自ら創作したものを発表、鑑賞することに重点を置く参加型施設。

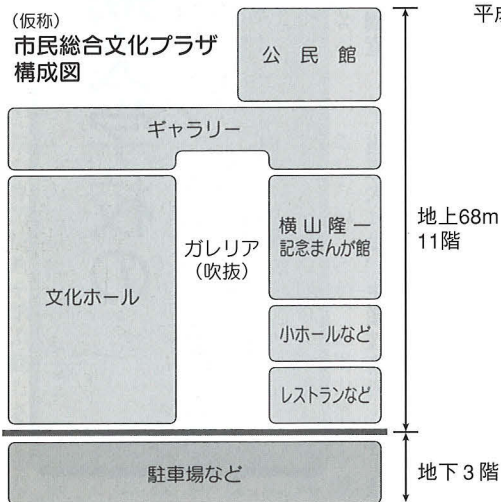
●（仮）横山隆一記念まんが館 展示面積千八百平方メートル、名誉市民横山隆一氏を顕彰するとともに、高知のまんがを文化として全国に発信できるもの。

●公民館 約三千五百平方メートル。市民の生涯学習の場として新しい時代の学習環境に対応した施設。

●その他の施設 地下三階まで約二百台収容の駐車場、レストラン、喫茶、入り口部の巨大な吹き抜け空間



平成13年度の完成を目指す（仮称）市民総合文化プラザの完成予想図



のモニュメント「魚タワー」を見ながら四階へ上がる。オープン階段から横山隆一先生の歴史へ。なかでも珍品コレクションやメルクリンの鉄道模型は子どもたちには最高の見せ場。また、カメラのコレクションはマニアからは絶賛されるほどの収集。（ここでは全ては書けない。オープンまでのお楽しみ）

展望階からは高知城も

七階はギャラリー空間。県立美術館とは違って、出来るだけオープンに徹し、五室を回遊しながら吹き抜け空間を含め多様な空間で鑑賞でき

（仮称）市民総合文化プラザ着工

千頭輝雄

のガレリア。

平成十年秋着工、十三年度工事完成をめざす。

といったことが施設の概要です。

さて、文化の殿堂と言うべきこの建物、おそらくこの規模の文化施設としては、高知市においても最初で最後でしょう。

それでは、この建物を少し私の感覚を入れてビジュアルにご紹介いたします。少し目を瞑って心を落ちつかせてください。

今、皆さんは「四つ橋」と言われる堀川の端に立っております。そこは江戸時代から発展してきた歴史ある地域。京都、大阪方面からきた物資を堀川から陸揚げし、船船が大勢出入りし、それは賑やかで、また、

高知市が発展してきた出発の場所。四つ橋の一つ「幡多倉橋」の高欄はそのまま東へ残し、シルエットを堀川へ映し込む。

以前の汚れた川ではなく昔の面影の階段から川へ下りていく親水空間へ生まれ変わって、堤には木陰を提供してくれる大きな木が何十本も並んでいる。夜にはライトアップされ、東からの桜並木と続いて、春には桜吹雪が最高の演出をしている。

巨大ガレリアがお出迎え

さあ、エスカレーターで建物の中の吹き抜けの巨大なガレリア（アーケード）。ここは雨にも濡れず夏は南から風が吹き抜けて気持ちがいい。

全ての施設へ入るターミナル的な場所。そう雑踏の中の静けさを演出できる所。丁度ニューヨークのグランドセントラル駅の様な場所。

それでは、新築のホールへ。ホワイエは二層吹き抜けでガラスのカーテンウォールから堀川の眺めは気持ちがいい。このホールは演劇を主体に考えているため、舞台から客席後部までの距離が短い。いわゆる役者の肉声や顔が見えるといった特徴がある。また、四層のバルコニー席があり本格的にオペラが鑑賞できる。当然音響は日本一。何か心がわくわくしてきた。

三階はエスカレーターでもシーッスルイーのエレベーターでもいける「横山隆一先生のまんが記念館」。まず入ると高知県出身のまんが家のコーナーへ。吹き抜けにある先生の力作

る。展示部分は約千五百平方メートル。一度に開催できる。

公民館にはお茶席もある。ここで一服頂いて。ここは九階とは思えない落ち着いた雰囲気がある。

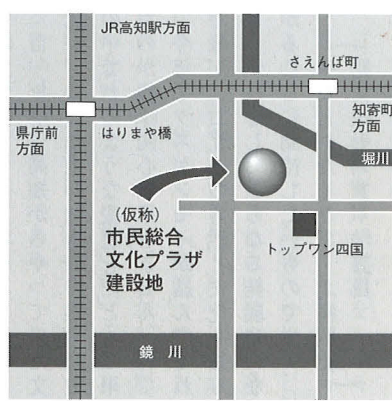
また、屋上は市民が自由に出入りできる展望階になっている。北には遙か北山から高知城もみわたせ景色は抜群。

さて少しお腹がすいた。一階のレストランで少し座ってみるか。

もう外は夕暮れになりかけて堀川のボードデッキに明かりが灯り、堀川にホールのホワイエからの明かりも水面に映り、イルミネーションそのまま。テーブルにロウソクが入り、シェフ自慢の土佐の魚を使ったフランス料理。新鮮だから最高に旨い。おまけにワインはボージョレーヌーボーの赤。これはいける。友人と、しこたま飲んで少し酔っぱらったようだ。

「おい、おい」の声に揺り起こされた。ふっと目が覚めるとそこは広々とした駐車場のテントの中。そうか今日は起工式だった。紺碧の青空、太陽の光が眩しい。そう、今のは虚夢か、それとも正夢か。

（ちかみてるお・高知市文化体育）施設建設室文化施設担当課長



# 高知職業能力開発短期大学の現状と課題（上）

鈴木堯士

## 実践技術者の養成

高知職業能力開発短期大学（通称ポリテクカレッジ高知）は、労働



高知職業能力開発短期大学の全景

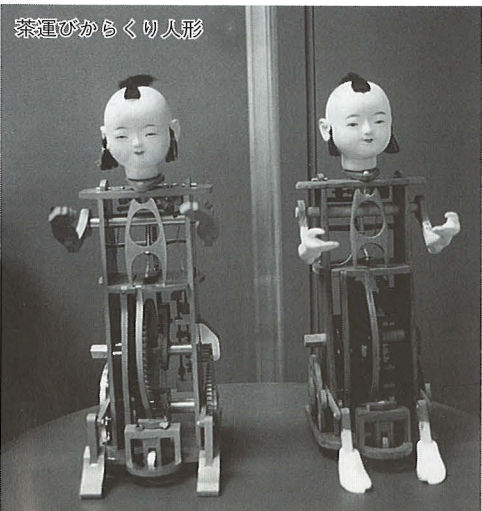
省所管の準国立（雇用促進事業団直属）の工科系短期大学校です。平成六年四月に全国で最後の二十六番目に開校した新しいポリテクカレッジで、設置場所は高知市から東方約二十キロの香美郡野市町西野の田園地帯です。

野市町は高知市のベッドタウンとして、最近の人口増加率は高知県内で第一位にランクされており、今後ますます発展するものと思われ、野市町には、日本の歴史を揺り動かした坂本龍馬の足跡をたどる「龍馬歴史館」があり、藩という小さな枠にとらわれず世界に目を向け、激動の時代を駆け抜けた三十三年の生涯を百八十体の蠟人形で再現しています。また、三宝山の麓には、「高知県立のいち動物公園」があり、親子連れで賑わっています。その他、四国霊場第二十八番札所「大日寺」もあります。

当短大には、生産技術科・電子技術科・情報処理科・産業デザイン科の四学科があり、一学年の学生定員は八十名です。専門課程では、地域社会に密着した「ものづくり」教育を目指して、学生に理解しやすく、しかも興味を持てる内容で講義・実験・実習が行われています。学生は二年間で一般教育科目・専門教育科目合わせて百五十六単位修得することになっており、四年制の国立大学で四年間に百二十四単位の修得に比べ、はるかにハードなスケジュールになっています。しかし、当短大の学生は真面目にしかも熱心に学んでいる姿が印象的です。

## 充実した教育環境

当短大の特色は次の通りです。第一に、本校は職業能力開発促進法という法律をもとに、ハイテクノロジ



蠟人形のからくり人形

人に比べはるかに恵まれており、マンツーマン体制での行き届いた少人数教育が行われております。

第三に、本校には前述した四つの学科があり、意欲的な勉学によって、産業界の強い要請に応え、産業界から歓迎される実践技術者の卵を世に送り出しております。

第四に、学費が安いという特徴があります。授業料は年額わずか二十五万九千九百円で、これは国立大の約半額です。また、奨学金制度も整っており、約八割の学生に貸与されています。貸付金額は月三万八千円から四万五千六百円です。さらに、キャンパス内にある学生寮はすべて個室で、この度増築され、収容人員が六十八名になりました。

第五に、卒業後の進路についてですが、本校では教職員全員が就職活動のバックアップを熱心に行っており、これまで三回の卒業生の就職率は一〇〇%で、この不況の中、求人数は年々急増しており、うれしい悲鳴をあげています。

六番目の特色としては、広々としたキャンパスがあげられます。美しい環境の下、本館・実習棟のほか、素晴らしい運動施設や図書館、学生交流の場としてのモダンな学生ホール、緑と花のあふれる学生広場などが完備されており、楽しい学生生活を送れるものと思います。

## 意欲的な学生たち

私は昨年三月、高知大学を定年退職し、当短大に赴任して一年余りですが、驚くのは学生の目の輝きが違うことです。生き生きしたい目を

しています。

当短大で地域社会に根付いたものづくりは枚挙にいとまがないほどです。例えば、有名な細川半蔵の「茶運びからくり人形」をCAD/CAMシステム（コンピュータ自動加工装置）を使って復元し、雇用促進事業団の理事長賞を受賞したり、人手不足で衰退気味の伝統技能である「土佐漆喰」を後の世まで継承する努力がなされたり、「高知市中種商店街」の活性化のために未来設計図をコンピュータで立体的に再現したり、林業の盛んな高知県のために「木材の搬出方法」を多角的に検討したり、「集成材の節」を自動的に識別・排除する装置を開発したり、野市町や赤岡町の「まちおこし」をいろいろなものづくりで援助したりなど、この一、二年間のものづくりだけでも素晴らしい成果をあげています。

これらのことが、応用力豊かな頭脳と鍛えられた腕を併せ備えた実践技術者に結びついていくものと考えています。言い換えれば、優れた技術力と、新しいものを生み出す柔軟な頭脳とバイタリティーを備えた技術者の養成につながっていくものと思います。

学生の声を拾ってみますと、「最先端の専門技術を学ぶ難しさを感じ

時代の優れた技術者、いわゆる実践技術者（テクニシャン・エンジニア）の育成と、地域産業社会への寄与という明確な目的と理念を持って設立された短期大学校であるということです。

第二に、本校は実践技術者を育成するという目的と使命から、理論学習と実験・実習を融合させた独自の実学的教育カリキュラムを採用し、豊富に備えられた最先端の装置・機器を用いて徹底した少人数教育を行っています。設備に関しては約二十四億円の投資をしており、県内の大学・専門学校に優るとも劣らぬ充実ぶりであると自負しております。教員一人当たりの学生数は平均七人で、国立大の十・十五人、私立大の三十



機械加工実習室の一部

ている反面、興味を一層そそられます。みんな真剣なので授業は集中できます。先生方も熱心に教えてくれますし、少人数制なのでマンツーマンのようにきめ細かな指導を受けることができます。「入学してみると、一日びっしりの授業内容とレポートの山、かなり忙しい毎日なんです。大変というより充実感が大きいですね。本校はやる気があればエンジョイできることは間違いなしです」など、学生の真剣さ・やる気を十分に汲み取ることができました。

（開発短期大学校長・高知大学名誉教授）

少人数教育（デジタルストップウォッチの実験）

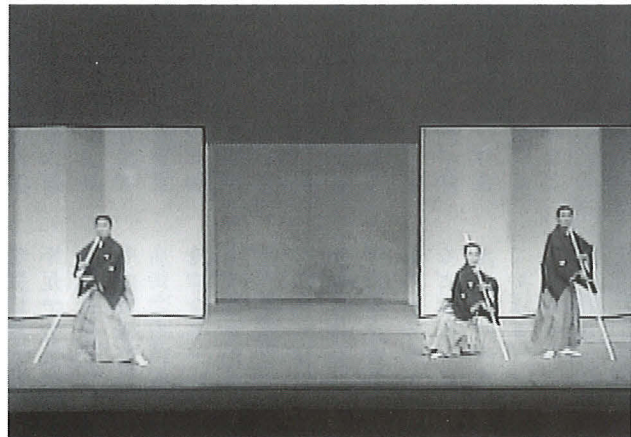
# 地元日舞の存在感

細木秀雄

県民文化ホールが平成十年度の自主文化事業として、「人間国宝 土佐に舞う」という催しを実現させたことは喜ばしい。人間国宝を呼んで、その踊りを見せるだけでなく、地元の日本舞踊家にも出演の場を設けて、緊張感のある舞台をつくりあげたのは大いに意義あることである。

「新曲浦島」は坂東三津二郎、三津兵衛、藤間香賜の三人立ちで、踊りとしては上の部と聞いていいが、長唄のうたい方に不満が残る。この作品は坪内逍遙が自らの「新楽劇論」のサンプルとして作った舞踊劇の「序之幕 澄の江の浦」に当たるもので、いわば全幕の序曲だが、初出以来、上場されるのはほとんどこの場だけである。

あまりドラマチックなものを予感させることもない単純な序曲で、変哲もない海の叙景が続くだけである。だのに長唄がうたっている詞章がよく聞き取れない。発声の問題である。オツに構えこんでうなっているが、義太夫を除く現代の古典芸能に共通する嫌みなどところである。一般の観客に、うたを正確に伝えようとするうたい方をしない。



新曲浦島

「それかあらぬか」からが三津兵衛の持ち場で手慣れた踊りだが、こもよく聞きとれるのは「沖の鷗のむらむらばつと」ぐらいで、あとは不明瞭。ちよつと敬うような振りがあるが、それは「げにも不老の神人の」のくだりで、長唄がはつきりうたわれないから、踊り手が何をしているのか分からないだろう。



藤娘

「さて西岸は名にし負う」で香賜と入れ替わる。香賜はまじめな努力がうかがえる落ち着いた踊りだが、「夕日が浦に秋寂びて」以下の長唄地がひどい朦朧調なので、踊り手の動きの意味がほとんど分からない。極端にいえばからくり人形の動きを見るよ

うである。そのからくり人形にいのちを吹き込むようなうたい方をしてほしい。

三津二郎は「錦繡のとはり」で、両手を左右水平に大きく動かして、奥の屏風の前から舞台中央へさーっと出てくる気合いから、「あれいつのまに一つ星」まで見事なものだったが、続く「雲の真袖の綻び見せて、斑曇り」とくると、人困らせな逍遙若書きの悪文としか言いようがない。いちがいにうたい手ばかりを責められないところもある。

「藤娘」(藤間香津早、花柳寿延弥、坂



吉原雀



土佐風流

東藍乃、若柳智寿奈、若柳由喜春、山村彩也香)は、各流からよりすぐった若手主体の藤娘で、置き唄がすんで舞台がパツと明るくなつた瞬間の色とりどりな華やかさ、艶やかさは息をのむばかりだった。現代的な若い女性美と、古典的な伝統芸能美が鮮やかに一体化している。踊りの各段落ともういういしい柔軟さと流麗さがあつた。「男心の憎いのは」から「身は空蟬のから崎や……心矢橋のかちごと」までのくだりがひとときわ瑞瑞しかった。

「玉兎」(横山早矢、黒添ゆみ)は子供

のおどり推進会代表の少女二人。兎と狸が餅をついたり、カチカチ山の物語を踊ったりするもので、二人とも師匠に、仕込まれたお手本どおりといった感じで、寸法の合った清潔な踊りだった。将来性豊かである。「吉原雀」(花柳昌延、坂東佑之丞)は歌舞伎舞踊の味が濃く、見ている者をしてしばし伝統芸能の別世界へ浸らせてくれる。夫婦の鳥売りが吉原の放生会にくる。出演はいろいろあるが、今回はセリ上げで効果があつた。放生会の由来から始めるので、初めはやや荘重で品位のある踊りを見せ、しだいに廓気分を盛り上げて、洒落つ

「土佐風流」は初演時を上回る四十九人の大編成で、県日舞協会の発展性と存在感を印象づけるに十分だった。第四景の「竹林寺、ご詠歌」、第五景「どろめ祭り」、第六景「お月様桃色の童唄の回想」、第七景「坊さんかんざし」で哀感とコミカルな調子がないまぜになるあたりがハイライトだった。

最後に人間国宝・花柳壽楽が「石橋」を踊った。

ほそぎひでお・高知市文化推進協議会会長

# 満州(現中国東北部) 苦難の一年(中)

島田美喜子

## 放浪の旅に

東安を出てからどれくらいの日時が経ったのか、夜も昼も分からない生き地獄のような中を、ただ夢中であった。やっと新京(現長春) 駅で汽車から降りた。日本が戦争に負けたりしいという声を聞いたのは、新京の本社へ行く街の中であった。しかし私は「まさか負けることがあるか」と、まだそんな気持ちであった。大きなビルの電々本社は、各支局からの避難民でごった返していたが、握り飯とお茶をいただき人心地がついた。その夜は汗と泥まみれでも初めて安心して眠りにつくことができた。

しかし安息も一時だった。朝、まだ夜が明けぬ頃、「日本人は出て行け。ここは中国のものだ」と、全員が本社から追い出された。ズラリと中国兵が両側から銃剣を突きつける中を、両手を上げて外へ出た時、初めて日本が負けたことを実感した。中国人の態度はすっかり変わり、「リーベン、スーラー」(日本人死ぬ)と石を投げつけたりした。ついに私たちは、住む家もなく、食べ物もなく、着たきりの放浪の身となってしまった。

日本人街へ行っても誰もいなく、

家財道具も略奪され荒れ果てていた。一つ残っていた古い洗面器で、誰かの持っていたなげなしの米を炊いて食べた。

これからはどうしよう。(日本人は皆殺しにされる)とか(連れて行かれて暴行される)とか、悪い噂ばかりであった。ソ連兵に見つからないように、食べ物を探して畑に行った。探し当てたホンロペー(人参)を麻袋にこすりつけて土を落とし、そのまま食べた時のおいしかったこと。空腹をいやすために手はなかつた。

灼熱の夏が過ぎたと思ったら、もうすぐ冬が訪れる。大陸に秋はない。九月半ばになると雪がちらつき、厳寒の冬はすぐそこまで迫っているのに、防寒着もなければ靴下もなかった。「ああこれからの冬をどうしよう」「飢え死にか」「凍え死にするしかないものか」と泣きながら、斜面いっばいに咲いた白いソバの花のゆれる丘に出た。吹いてくる風に白一色の花の群れは、まるでさざ波の



当時の新京駅(現長春)

(「望郷満洲」より)

ように次々と打ち寄せていた。その美しさに心も安らいできた。「そうだ、弱気にならないで絶対生きて帰るのだ」と一人うなずいて皆の後を追った。帰国してからも、ソバの花の咲く頃になると、異郷の地での苦しかったあの頃を思い出し、いつまでも忘れることができない。

## 緑園での共同生活

それから、牡丹江管理局の方たち

と一緒に、新京郊外の緑園にある電々の「稚武寮」へ行くことになった。

その頃、もう顔にあたる風は刺すように冷たく、手拭いで頬かぶりをしていた。辺りは広々とした草原で日本人の社宅が並んで建っていた。寮の玄関には、マリーゴールドの花が咲いていて心をなごませてくれた。みんなで話しあって、寮長、副寮長を決め、青年隊、女子隊、家族グループと分けて、それぞれの役割を決めた。総勢二百人ぐらいが共同生活をして、力を合わせ、助け合って頑張る冬を越し、日本へ帰る日を目指すことにした。

長い冬に備え食料など確保のためにと、現地人が管理している旧日本の兵舎へ集団で盗みに行くことになった。

中国語の話せる年配の人たちが、手に手に鎌や棒切れを持って、正面門へ押しかけた。大きな声でけんかを仕掛けて中国兵を集め、その隙を見計らって、裏から元気な若者たちが大勢で中に入り、大急ぎで食料、衣類、食器などを背中に負った麻袋に放り込む。中国人が気が付くと見張り役の合図を受けて急いで逃げたが、後ろからパンパンと銃で打たれた。残念なこと犠牲者も出た。

## ソ連兵の襲来

その頃、越境してきたソ連兵が、日本人に略奪や暴行を加えて大きな恐怖であった。見張りをつくり、ソ連兵が近づくと金物やブリキ缶などを叩いたりしていたが、ある時寮の玄関まで来た。非常ベルが鳴り「女は皆隠れろ」と鉄の扉を閉めた一室で、みんなひと固まりにもぐり込み、息を殺して震えていた。今にも部屋



に入ってきて捕まえられ、連れて行かれるかと思うと生きた心地はしなかった。この時はお金を出して片がついたと聞き、胸をなでおろした。しかし、何時また来るかも分からないとみんな顔に墨を塗り、盗つてきた軍服を着た。ダブダブで指先まで隠れるぐらい大きかった。ある日突然、何の前ぶれもなくド

い時間のよう思われた。後からもワナワナと震えが止まらず、口もきけなかつた。

## 募る望郷の念

外は氷点下三〇度ぐらいか、吹雪は悲鳴に似た叫びをあげ、雪は積もり新京の冬も厳しかった。二重の窓から、ヒシヒシと寒気は迫る。寮の中は空き部屋から、床も天井も押し入れの戸棚まで燃料となつてしまった。寒さもさることながら、片時も忘れないのは、なつかしい故郷のことばかりであった。今頃みんなどうしているだろう。日本へ帰りたい、早く帰りたい、陸つづきであったら何年かかっても歩いて帰るのに……。涙がこみあげてくる中で故郷の唄を歌った。「うさぎ追いかの山……」。みんなも歌い出した。「荒城の月」「椰子の実」など、次から次へと合唱していると、望郷の念を抑えきれなくなり「こうちー、こうちー、十分間停車、高知駅でございまーす」と駅のアナウンスの真似をした。すると「いいだー、いいだー、飯田駅で……」と声を張り上げたのは長野県の人だった。懐かしい故郷の駅に降り立った夢に浸って、みんな泣きながら喜んだ。

(しまだみきこ・主婦)

# 石がまわる

三木京子

ほんやりしていた私の前に、テレビ画面はゆっくりと回る石の風車を映し出していた。

「えっ、何これ。どんな仕掛け。本当に石？」

実物を見てみたい。場所はどこなのか。大きさは。などなど思ううちに画面は次の番組に移っていた。石なら香川県かなあ、ぜひ行ってみたいなどと思いつきながら、説明を何も聞いていなかったことが悔やまれた。

しばらくして、息子が高知市介良の田園風景の中にそれを見つけて来てくれた。道路に近いところ、石柱の上で大きな風車が一つゆっくり回っている。奥の方では寝かされた粗削りの岩に小振りの風車がいくつも取りついていて、これもまた思い思いの速度で回っている。

縄を張っただけの無人の仕事場に勝手に入り込み、ただただ感動しながら、そんな風車を見てまわった。

電源からつながれたコードも見当たらない。格別の仕掛けも見つけられない。

とても不思議な世界であった。私にとって石は動かないもの。重たいもの。拳より大きい石は波に流されても、風には凜々しいものであった。その石が風と遊んでいるようにさえ見えた。

平成六年土佐山田町に町立の美術館が建ち上がる時期、モニユメントの一つとして「石の風車」を設置できることになった。その作業中、すぐ側の八王子宮へ引率されて遊びに来ていた養護学校の生徒たちの姿に打たれるものがあった。彼らにも親しまれる風車になってほしいとの思いで、「こどもたちへ」と作者の門脇おさむさんは題をつけられた。

昨年、身重の奥さんを伴って香川県から青年が美術館へ来てくださった。



「こどもたちへ」と名付けられた「石の風車」

土佐山田町立美術館正面



「この前訪れた時、風車は回っていませんでした。これは回るものなのかどうか。回るものならその姿を見てみたい。今日は回っていてよかったです」

展示場へは、おまけで入館していただいたような具合であったが、お二人の笑顔はうれしい姿であった。

門脇おさむさんは最近、久留米市上津町に「石のトンぼ」を据えられたようだ。送っていたいただいた写真では、トンぼの揺れている様が分かる。たぶん大きな目玉を持った石がゆっくりにゆっくりに動いて、のどかさを醸しだしているのだろう。

そんな中におが身を置いて、できることなら発想の豊かさや柔らかなさをもう一度育てたい。

（みききょうこ・土佐山田町立美術館館長）

## 民俗雑記帖4 舟入川

梅野光興

あの九月二十五日の朝、「一宮の営業所が冠水しているため、県交通のバスはいっさい動いていません」とのラジオを聞いて、大津バイパスへと向かった。そこも長蛇の車の列。国分川の橋のたもとで車を止めている人がいる。事故だろうか、と思いつきながら近づいて

いつて驚いた。バイパスが水の中に消えてなくなっている。堤防なら行けるかもしれないと思って狭い道に入ると、さらにもういっぺん光景が広がっていた。一階部分が水没した家、途方に暮れていたたずむ人、そして国分川の両側はさながら湖のように……。

高知県立歴史民俗資料館では、十月三十日から来年一月十七日にかけて『昔のくらしと道具』と題し、大津民具館に収蔵されている資料を展示することになっている。

大津民具館は、大津がまだ長岡郡大津村だった昭和四十一年、当時の村長であった徳弘勝さんの肝入りで作られた民具館である。資料は五百点以上集まり、県内では整理分類が行き届い

ている民具館であった。

だが、建設から三十年が越えた今、名札が取れたり、使っていた人たちがいなくなり、民具の名前や使用法が分からなくなってきた。地元の主婦たちから、もう一度民具館を整理しようという声があがってきた。その声を受けた高知市教育委員会の社会教育課の方が歴史館に相談に來られ、みんなで大津民具館の整理調査をしようということになったのである。それから五、六年経ち大体カード化できたので、今度は私の方からお願ひして、歴史館で展示をしたいともちかけた。地元の人たちに話を聞かせていただいたり、戦前の家並を調べて子どもたちに立体模型を作ってもらうなど、一カ月前に迫って準備は追いつきだした。その矢先に今回の大洪水が起こったのである。

大津地区は、周辺の高須、布師田などとともに冠水し、もっとも被害の大きな地区になった。主力になって準備していた方々の家も、話を聞いている途中だった人の家もみな被害にあった。このまま展示を行ってよいのだろうか、との思いが頭をかすめた。

しかし、準備にあたって頂いていた方々の声は、「大きな協力は難しくなったが、ぜひ展示は実行してほしい」というものであった。私は逆に励みされる格好になった。

今回の展示のテーマは大津の昔のくらしの一端を明らかにすることだったが、中でも舟入川が柱だった。聞き取り調査の中で驚いたのは、今は静かな舟入川が、かつて物資を運搬する動脈としてにぎわっていたことだった。材木を組んだイカダや、石灰を乗せた船が、舟入川を往來していた。また、この川は、広大な香長平野の田をうるおす灌漑用の水路でもある。その大事な水路を清掃するために三月はじめに田役による川干が行われている。

舟入川は、また夏の子どものための遊び場でもあり、洗い物のため日常的に利用されていた。農閑期には何人かで誘いあつて舟に乗り、浦戸湾へ行って釣った魚を食べるのが何よりの楽しみだった。

川は大津の人々の生活と密着していたのである。

ところが、一度大雨が降ると、その同じ川が人々に災厄をもたらす川となった。そして今回も、大津を襲ったのである。自然の脅威をまざまざと感じざるをえなかった。私たちの自然とのつきあいは今後どのように変わっていくのだろうか、被災地の人たちの苦勞を思いながら、展示の準備を進めている。

（うめのみつおき・高知県立歴史民俗資料館主任学芸員）



関付近の舟入川の風景



高知市秦地区の北山に地元のコミュニティ市民会議によってこの春ハイキングコースが整備された。コース内にはミニ八十八カ所や土佐藩士で薩長同盟の実現に尽力した土方久元の生家跡、平家伝説のセツ瀧神社などがあり、自然や歴史が探訪できる。案内板や史跡等の説明板も要所ごとに設置され、北山スカイライン沿いのポーロック峠までいくと、五台山、浦戸湾、烏帽子山などの眺望が楽しめる。便利なマップもでき、市役所などで無料で配布されている。

## 風俗

### 口琴

九月七日夜、高知市横内の星ヶ岡アートヴィレッジで、日本口琴協会代表・直川礼緒(ただがわねお)氏による口琴コンサートが催された。

同氏は早稲田大学文学部演劇科卒。シベリア、欧米、東南アジアなど、世界各地の金属、骨、竹、木などを素材とする、さまざまな

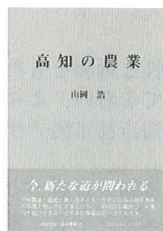
がまの口琴を収集し、研究を続けている。当夜は、まず、自然音や人声の模写から始まって、童謡や、中央アジア・キルギスの伝統曲などが演奏され、続いて、カラフルな民族衣装をまとった、各地住民たちの演奏風景のスライド映写と共に、口琴の奥の深さが、熱っぽく語られて、参会者を魅了した。

口琴は、各地の片隅にひそやかに埋もれているような楽器であるが、唯一、シベリアのサハ共和国においては、最も重要な楽器として、祭礼などの行事に活躍していて、同国には、(国際口琴センター)が置かれていると言った。

今年、口琴を何百年も作り続けてきた『鉄のまち』、オーストリアのモルン市で、第三回国際口琴大会が開かれる。口琴に幸(さち)多かれと祈る。(一)

## 高知の農業

山岡 浩 著



A5判・並製本・248頁  
本体価格 1,800円

農協組織に半世紀近く勤めた筆者が地域農業・農産・農に生きる人々をつぶさに訪ね高知県農業の実像を明らかにするとともに、特徴的産地づくりの事例を紹介した書。

## 土佐の習俗 婚姻と子育て

坂本正夫 著



四六判・並製本・200頁  
本体価格 1,400円

民俗学の宝庫といわれる土佐の村々を歩き、土地の古老たちから伝承を採集。35年にわたる調査研究の中から婚姻と子育てに関する伝承・習俗を体系的にまとめた書。

## 今号の表紙

### 「桂浜」 二神敬之介

桂浜は描きにくい風景である。銅像前のコンクリート階段を十数段下りた所で龍王岬を見ると、老松の大樹が、土佐湾と浜全体を抱えこむようにおおいがぶさっている。

これだと思ってシャッターを切った。一昨年の夏、浜に照りつける陽光と樹々の濃緑のコントラスト、近景に人物を配して決まった。(ふたがみけいのすけ・高知県美術家協会(洋画部)会員)



第14回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

## 高知を撮る

### 山里に暮らす(平成4年 椿原町)

福田芳孝

「環境ホルモン」がにぎやかである。もともと深刻な問題ではあるが、一般の人々のホルモンへの思い込みが騒ぎを大きくするのの一役かっているようである。もともと、ホルモンとは、身体の状態を調節するためのいろいろの臓器から血液中に分泌される(内分泌)離れた臓器などの働きを「遠隔操縦」するための物質である。

新聞報道によると、「環境ホルモン」というのはおかしい、というので、「日本内分泌攪乱化学物質学会」という学会が誕生したようである。アナウンサーの発音テストにも使えそうである。

ホルモンというと、いわゆる性ホルモンを連想する人が多いが、「ダディ」が聖子ちゃんを見て分泌したというアドレナリンも、糖尿病の人が注射するインシュリンも立派なホルモンである。

教科書では、アドレナリンのように、血液中に分泌する物質を「内分泌物質」、汗や消化酵素のように、体外や消化管などに分泌する物質を

## ホルモン

一体の内と外



### 風俗歳時記

「外分泌物質」と説明しているが、簡単に言えば、体外に分泌するのが内分泌で、体内に分泌するのが内分泌である。

人間はちよつとした外見でだまされやすい。アーンと開けた口の中を、体の中だと思ふ人は少ないと思うが、のどが狭いので、その中の食道や胃のトンネルは体内のように錯覚する。消化管の中は、口から肛門まで、体外である。従って、唾液も胃液も、汗と同じように、体外に分泌される外分泌物質である。

同じ意味で、肺の中も、子宮やそれに続く卵管の中も体外である。だからこそ、卵子は卵巣から、「体外」の卵管に「排卵」されるのである。かくして、卵は到着した精子と「体外受精」したのち、めでたく体外の子宮で育つことになる。

「思いを込めて」女性の体内に送りこんだつもりなのに、実は体外に放出したのと同じことだ、などと言われるのは、まことに心外な話ではあるが……。(路)



## 第15回 高知市都市美デザイン賞 推薦募集

事業団では、街に個性と調和をもたらしている優れた建造物を広く知ってもらい、より美しいまちづくりを進めるよう「高知市都市美デザイン賞」を出しています。

身のまわりで、街の美観や景観づくりに貢献している建物・公園・モニュメントなどを推薦してください。

【対象】高知市内にあって平成10年1月1日から平成10年12月31日までに完工した建築物・建造物

【推薦締切】平成11年1月29日(金)  
(郵送の場合当日の消印有効)

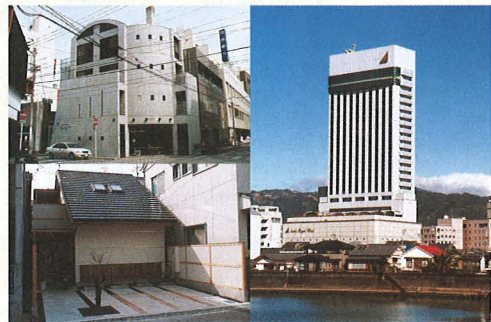
### 【推薦】

どなたでも推薦できます。はがきに次の事項を記入のうえ、推薦してください。一人で何件でも推薦できますが、はがき1通に1件とします。

- ① 建築物・建造物の名称・所在地・完成時期
- ② 推薦の理由
- ③ 推薦者の住所・氏名・年齢・職業・電話番号

### 【送り先・お問い合わせ】

(助)高知市文化振興事業団「都市美デザイン賞」係



●第14回受賞建築物

## 第15回 写真コンテスト・高知を撮る 作品募集

### 【テーマ】高知を撮る

\*高知に関する写真であれば撮影対象は問いません。

### 【応募】

\*どなたでも、一人何点でも応募できます。  
\*254mm×365mm(ワイド四ツ切)以上の作品で、発泡スチロールパネル貼りとします。

\*組写真は3枚までで、組写真であることを明記してください。

\*その他詳しい要項は事業団までお問い合わせください。

【応募締切】平成11年1月29日(金)

【賞】 特選 2点(賞状と賞金5万円)  
準特選 15点(賞状と賞金1万円)  
入選 70点以内

### 【作品展】

平成11年3月市民フロアにて開催予定

### 【応募先】

\* (助)高知市文化振興事業団  
\* 高知県カメラ商組合加盟店または、  
フジカラープリント取扱店

●第14回入賞作品

